



## 群馬大学大学院医学系研究科生化学分野より

南嶋 洋司

三方を上毛三山に囲まれ、陸から昇った太陽が陸に沈むここ前橋の景色は、福岡市・鹿児島市・宮崎市で育った根っからの九州人である私にはとても新鮮なものでした。この稿を脱しようとしているここ数日は上州空っ風もようやく大人しくなり、街中のあちらこちらで咲き誇っていた桜(図1)はすっかり散り、薄い桃色だった街の色が真新しい緑に入れ替わった直後であり、北関東でもようやく平成最後の春の訪れを実感できる気持ちのよい毎日です。

我々の研究室では、生化学・分析化学・分子生物学・細胞生物学的手法と *in vitro*, *in cellulo*, *n situ*, *in vivo* の実験系を組み合わせ、低酸素応答による代謝の制御、生理活性を持った脂質の代謝機構、DNA 傷害修復や細胞老化のメカニズム、がん特異的な代謝機構の解明などを目標とした研究を進めております。前任の和泉孝志先生の後を2018年の12月に私が引き継がせていただいたばかりの、スタッフ・院生・学部生あわせて10人ちょっとの研究室です(図2)。

この稿を書かせていただいている私自身は1993年に九州大学医学部を卒業し、そのまま母校の第一外科の関連病院で癌や腎移植の外科医として5年間トレーニングを積みしました。九大の生体防御医学研究所の中山敬一教授のラボで大学院生として厳しく鍛えていただき2002年に渡米し、BostonにありますDana-Farber Cancer InstituteのDr. William “Bill” G. Kaelin Jr. のラボで現在のメインテーマである「低酸素応答」についての研究を始めました。渡米後8年半が経ち、ようやくの帰国を決意したとき、Billから「君が

作ったマウスは日本に持ち帰って、今の研究をちゃんと論文にきなさい。ただし、私の名前を著者に入れてはならない。なぜならば、私の名前が君の論文に入っている限り、君は私から独立したとは見做されないからだ」と言われ、そこでようやく「P.I. (principal investigator) の使命とは、次世代の研究者を育て輩出することなのだ」という、至極当たり前のことを改めて認識させられました。「自分もそんなP.I.になろう」と決意し、2010年秋に帰国し、慶應義塾大学医学部講師、九州大学生体防御医学研究所特任准教授を経て、これからの医療や生命科学研究を担う若手の育成に注力すべく、ここ群馬大学で研究室を構えさせていただくことになりました。物事を理論立てて捉え、次になすべきことを自力で考え、自ら独立して研究を進めていく能力と、“*Philosophiae Doctor*”と呼ぶにふさわしい真理を追求する哲学・高い倫理観・美意識・美学を、Lab meeting, Journal clubやラボの日常の中で涵養して行こうと思っています。関東～北関東での大学院進学先を探しておられる臨床医・修士学生・学部生さんなどが周りにおられましたら、選択肢の1つとして是非当研究室をご紹介いただけますと幸いです。生化学会会員の先生方、どうぞ宜しくお願い致します\*。

最後になりましたが、大学院生の頃から厳しくも優しくご指導くださった九州大学の中山敬一先生、研究者としてのあるべき姿を示してくださったDana-Farber Cancer InstituteのDr. William G. Kaelin Jr., 慶應義塾大学在籍中に大変お世話になった現AMED理事長の末松誠先生に、この場をお借りして感謝申し上げます。



図1 前橋公園桜並木から群馬県庁舎を臨む

利根川河畔の前橋公園にて、前橋市内を流れる広瀬川から利根川へ注ぐ柳原放水路沿いの桜並木から、前橋市のランドマークでもある群馬県庁舎を撮影しました。

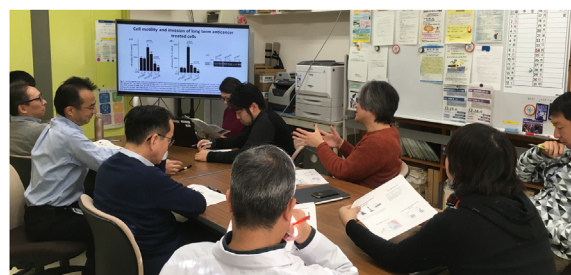


図2 週に一度のJournal clubの光景

当番の人は、自分が選んだ論文の簡単なバックグラウンドを説明し、各々がfigureの説明をしていながら、「もし君がこの論文の1st authorだったら、次にどんな実験をするか」、「もし君がこの論文のreviewerだったら、どんなことを著者に要求するか」、「この論文で最も弱い部分はどこか、そしてそれを補うために何をすべきか」などなど、自由にディスカッションします。

\*連絡先: minamishima@gunma-u.ac.jp  
<http://biochemistry.med.gunma-u.ac.jp>